

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>聴覚障がいのある幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、豊かな心とたくましく生きる力を育てる。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 3 豊かな自己表現力の育成 (コミュニケーション力の向上)</p>
---------------------------	---	----------------------	---

年 度		当 初		評 価 結 果 ( )月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
確かな学力の定着を図る学習指導の充実	(教務) つまずきの記録とその支援を中心に個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	教科等の個別の年間指導計画を作成し、単元ごとに評価規準と評価・指導の反省欄を設けて指導の充実を図っている。教科ごとにつまずきの記録を取り、指導に困難が生じやすい単元や分野を明らかにし始めたところである。	全教員が、つまずきの記録とその支援を中心に個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用して、授業を充実させている。	つまずきの記録とその支援を加味しながら、単元ごとに評価と実践の見直しを行うように教務部が呼びかけ、定期的の確認を行う。		
	(研究) 聴覚障がい教育の専門性の向上を図るための職員研修を充実させる。	聴覚障がいのある幼児児童生徒の認知の特性をふまえた適切な指導を行うこと、手話を効果的に用いて概念形成を促していくことが教師に求められている。一方で、職員のうち半数以上は豊教育に携わった経験が3年未満であり、専門性の向上を図ることは直近の課題である。	聴覚障がい教育に関する研修と教師の手話力の向上を図るための職員研修を実施し、それぞれ職員の8割以上が参加する。	①聴覚障がい教育に関する職員研修を計画、実施する。計画の際は、職員のニーズを抽出する。 ②教師の手話力の向上を図るための職員研修を実施する。		
	(研究) 幼児児童生徒の確かな学力の定着に向けて、校内研究の充実を図る。(小学部、高等部学ぶグループ)	昨年度までの校内研究により、ことば・かずや国語科、算数・数学科において授業づくりや教室環境に関する教師の意識が変容してきた。しかし、縦割りグループでの研究だったため、学部として研究が深まりにくかった。また、他教科へ取組を広げていく課題もあがった。	①つまずきの記録を授業実践に生かす。 ②授業研究会を小学部、高等部学ぶグループで年に1回以上開く。	①小学部、高等部学ぶグループの職員全員が児童生徒のつまずきの事例をあげるようにする。 ②教育研究部員が中心となり、授業研究会を盛り込んだ年間の研究計画を立てる。		
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実	(総務部) ①本校教育の理解や周知を図る情報を発信する。 ②地域の保育所・幼稚園に向けて啓発活動を行う。	①学校公開では、学校関係者以外の地域の来校も増えつつある。 ②保育所・幼稚園の啓発活動は計画どおりに進んでおり、中部地区の一部を残すまでに至っている。	広報活動の拡大や保育所・幼稚園への啓発活動などの取組により、本校教育の理解や周知が地域等に深まっている。	①学校公開の広報対象の拡大や野外掲示・屋内掲示等による情報発信を積極的に行う。 ②中部地区の保育所・幼稚園への啓発活動を行う。 ③『とりろうたより』の充実を図る。		
	(研究) 幼児児童生徒の自己理解・自己管理能力の向上に向けて、校内研究の充実を図る。(地域支援部、高等部知るグループ)	昨年度までの校内研究により、自己理解・自己管理能力に関する自立活動において、キャリア発達支援の視点をふまえた指導ができてきた。しかし、縦割りグループでの研究だったため、学部として研究が深まりにくかった。	①キャリア発達支援段階表を実態把握や目標設定、評価に活用する。 ②授業研究会を地域支援部、高等部知るグループで年に1回以上開く。	①学部研究会で、キャリア発達支援段階表を活用して自己理解・自己管理能力に関する個別の目標を検討し、学年末に評価する。 ②教育研究部員が中心となり、授業研究会を盛り込んだ年間の研究計画を立てる。		
	(生活安全部) 学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を基に心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活についての理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的に幼児児童生徒の実態に応じた指導を行う。	学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活について様々な行事を計画し、生活安全部の職員、学級担任を中心に指導を行っている。	心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活についての理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的・継続的に指導を行っている。	学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組事項を10項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して課題を明確にしてその後の取組に活かせるようにする。		
	(進路) 家の手伝いや学級で割り当てられた係、当番の仕事、職場体験・現場体験学習に積極的に取り組ませる。	集団生活におけるルールを守ること、職場における先輩への接し方等、社会性がまだまだ不足している幼児・児童・生徒がみられる。また、鳥取県における高卒者の離職率が、就職3年後に40%を超える状況になっており、全国平均を上回っている。	すべての幼児・児童・生徒が、家の手伝いや学級で割り当てられた係、当番の仕事、職場体験・現場体験学習に積極的に取り組むことができた。	家の手伝いや係や当番の仕事をはっきりと決め、それに取り組ませる。また、体験実習の事前指導・巡回指導等で実習の状況を把握し、不十分な点はその都度指導していく。さらに、企業や事業所からの評価をもとに、実習後の指導を行う。		
(情報) 聴覚障がい者にとって必要不可欠なツールになっている携帯やインターネットについて、生徒一人一人が正しい知識を身につけて活用できるように支援する。	インターネットは調べ学習等で有効に活用されており、携帯やインターネットの節度ある使用に関して、意識向上を呼びかけているところである。 携帯・インターネットを深夜まで利用することによって、体調を崩すケースも想定されるため、各学部・生活安全部・保健室との連携を図りながら注視することが必要である。	生徒一人一人が携帯・インターネットに関する正しい知識を吸収し、一社会人として必要な情報リテラシーを身につける。	①外部講師を招いて情報モラル研修会を実施し、8割の職員、生徒、保護者が参加する。 (中学・高等部生徒向け：4月、保護者向け：6月) ②各学部・生活安全部と連携した指導・啓発を行い、年2回情報交換を兼ねた協議を行う。 ③情報機器の維持・管理に努め、新しい機器を使用しやすいように整備する。			
豊かな自己表現力の育成 (コミュニケーション力の向上)	(研究) 幼児児童生徒の伝え合う力の向上に向けて、校内研究の充実を図る。(幼稚部、中学部)	昨年度までの校内研究により、朝の会、音楽科、体育科の学習において伝え合う力段階表を活用した授業実践に取り組んできた。しかし、特に音楽科・体育科については伝え合い活動と技能の向上との両立が難しかった。また、縦割りグループでの研究だったため、学部として研究が深まりにくかった。	①伝え合う力段階表を実態把握や目標設定、評価に活用する。 ②授業研究会を幼稚部、中学部で年に1回以上開く。	①学部研究会で、伝え合う力段階表を活用して伝え合いに関する個別の目標を検討し、学年末に評価する。 ②教育研究部員が中心となり、授業研究会を盛り込んだ年間の研究計画を立てる。		
	(生活安全部) クラブ活動や部活動を通して児童生徒の自己表現力や自主性を高めることができるよう指導を行う。	活動に対する興味・関心は高いが、教員の指導に頼りがちで十分に自主性を発揮しているとは言えない。各部で部会を開き、活動内容に見通しが持てるよう支援を行っている。	活動を通して児童・生徒の自己表現力や自主性が高まるよう指導を行う。	児童生徒との話し合いを通じてクラブ・部として、また個人としての目標・課題を明確にすることで意欲的に活動に取り組めるようにする。		
	(生活安全部) 児童会・生徒会において児童・生徒が計画に基づいて見通しを持って活動していけるように指導する。	児童会・生徒会役員になった児童・生徒はその責任を果たそうとしている。話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていくこと、個々の児童や生徒の意見を吸い上げてよりよいものにまとめることについては教員が支援を行っている。	児童生徒が計画に基づいて児童会・生徒会を運営し、学校生活の充実と向上のために問題を協力して解決できるよう指導する。	児童会・生徒会の年間計画を作成し、役員児童生徒を中心に話し合いの進め方、活動の準備等に関する助言や指導を行う。		

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%) C:変化の兆し(60%) D:まだ不十分(40%) E:目標・方策の見直し(30%以下)